

社報 御霊本宮

第70号

発行者

御霊神社本宮
宮司 藤井利夫
五條市靈安寺町
0747-23-0178

発行日

令和3年
1月15日

とんど

一月十四日を中心に、神社や自治会で「とんど」が行われます。「左義長」とも呼ばれるこの行事は、正月の松飾り、注連縄などが各家庭から出され、定められた場所で焼きます。

毬杖と呼ばれる、ホッケーに似た遊びに用いる長い柄のついた槌を三本立てて焼いたことから三毬杖と言い、左義長という表記に変わりました。

このとんどの火は神聖な火とされ、餅や団子を焼いて食べたり、字を書いた半紙を燃やして書道の上達を願ったりします。多くの土地では、火にあたりとじようぶになるとか、その火で焼いた餅を食べると病気をしないなどという火の信仰が伝承されています。



私（宮司）が子どもの頃、かまどでご飯を炊いていた頃は、とんどの火をもらって帰って、小豆粥を炊きました。平安時代の延喜式には、正月十五日に小豆粥を食べると、一年間の邪気を祓い、万病を除くという記載があります。紀貫之の「土佐日記」や清少納言の「枕草子」などにも、小豆粥についての記述があります。

では、なぜ小豆なのでしょう。それは小豆の「赤」が関係していると考えられます。

古来、中国や日本では、「赤」は生

命や炎を象徴する色であると同時に悪霊や不浄を祓う霊力を持つ色でもあると考えられていました。さらに、古代日本では、飲食物の中に霊力や呪力が宿っているという考えもあり、そういった食物を食べることで、その力を内に取り込むことが出来ると信じられていたのです。これは今も、神事の後に神前に供えた物を食す「直会」という行事として残っています。

とんどに話を戻します。県内のとんどで有名なのは御所市の吉祥草寺「茅原の大とんど」でしょう。県内最大、県指定無形文化財で千三百年の伝統を誇ります。

毎年一月十四日に行われている茅原の大とんどは、修正会の結願の行事として行われ、五穀豊穰・厄除けなどを祈願します。まず本堂で読経が行われ、その後六メートルを超えるとも言われる雌雄一対の大松明（雄松明・雌松明）に点火されます。

※今年中止となりました。

歳旦祭齋行しました

一月一日、午前〇時より本宮の歳旦祭を、午前〇時半頃から統神社、午前一時過ぎから二見御霊神社の歳旦祭を齋行しました。コロナ終息と皆様の健康と弥栄をお祈り申し上げます。今年はコロナ流行の影響もあり、またかなり冷え込んだこともあって、どの神社も例年より参列者が少なくなっていました。

初戎で賑わい



五條町の恵美須神社では、九日から十一日まで初戎で賑わいました。三日間とも早朝は積雪や降雪がありましたが、日中は概ね良い天気となり、多くの参拝者が訪れました。コロナ終息と、外出自粛による経済悪化を吹き飛ばそうという思いからか、大きな吉兆を求める人が多くいました。

カンジヨウガケ

日本の村落において、村と山の境界にあたる野良、あるいは村と村の境には、古くから魔や疫病をはやらせる神などが出入りすると考えられていました。出入り口にあたる道には魔を防いだり、追いつくために道祖神が祀られたり、注連縄や藁で作った蛇を張ったり、草履や草鞋を供えるなどの「道切り」行事が行われていました。



木更津市牛込の道切り

関西では近畿地方を中心として、村

境や辻、寺社の境内などに注連縄を渡す「勧請掛け」という行事が多く行われています。

また、比較的都市化の進んだ千葉県北西部地域（佐倉市、市川市、船橋市、八千代市）を含む千葉県各地で、名称はさまざまですが、道切りに相当する行事が現在も行われています。形態も、百足や蛇や龍の形をした綱を境界の木に据え付けるもの、同様の綱を道に張り渡すもの、人形や魚介類（蛸や海老）を模したものや草履などを吊り下げるもの、鹿島人形やお札を立てるものなど、多様性に満ちています。

市川市国府台辻切り

「辻切り」というのは人畜に害を与える悪霊や悪疫が集落に侵入するのを防ぐため、集落の出入口にあたる四隅の辻を霊力によって遮断してしまふことから起こった呼び名です。遮断の方法は注連縄を作って道に張るとか、大蛇を作ってその呪力によ

って侵入してくる悪霊を追い払うというような方法がとられています。千葉県では南部の地方では注連縄を張る集落が多く、北部の地方では大蛇を作る集落が多かったようです。

市川市でも昔は国府台、国分にかけて地域でさかんに行われた行事でしたが、太平洋戦争後は世相の移り変わりとともに次第にすたれ、今ではほぼ昔の姿を伝えているのは、この国府台の辻切りだけとなりました。

国府台の辻切り行事は毎年一月十七日に天満宮境内で行われ、各自が持ち寄ったワラで二メートルほどの長さの大蛇を四体作り、お神酒を飲ませて魂入れをして、町の四隅にある木に頭を外に向けて結びつけます。こうして大蛇は翌年まで風雨にさらされながら町内安全のため眼を光らせているのです。



八百万の神々

八十福津日神

やおまがつひのかみ
おおまがつひのかみ
大禍津日神

黄泉の国から帰った伊邪那岐神は穢れを祓うため阿波岐原で、「上つ瀬は速し、下つ瀬は弱し」と言い、中つ瀬に入りました。そこで体を洗うと八十禍津日神が生まれ、次いで大禍津日神が生まれました。古事記では、この二柱の神は黄泉の国に行ったときの汚垢によってできた神であるとしています。

「八十」は数の多さを表す語で、「禍」は「曲」に通じ良くないことを表わします。「津」は「すの」にあたり、「日」は霊格を示す語とされます。よって凶事や悪事に関する神と考えられています。

大禍津日神の「大」は美称で、同じく凶事や悪事に関する神です。この二柱の神は一对になっていますが、同一神とも考えられています。

初庚申

「初庚申」とは、その年の最初の庚申の日のことで、庚申信仰の様々な行事が行われる日です。

庚申信仰は中国道教の説く三尸説をもとに、仏教、密教、神道、修験道などの信仰や習俗などが習合した信仰となつています。

三尸とは人間の体内にいてと考えられている虫。上戸・中戸・下戸の三種類があり、人間が生れるときから体内にいとされます。大きさはどれも二寸(約6cm)ほどで、小児もしくは馬に似た形をしているとされますが、それぞれ別の姿や特徴をしていてもいわれます。

庚申の日に眠ると、この三尸が人間の体から抜け出し天帝にその宿主の罪悪を告げ、その人間の寿命を縮めると言い伝えられ、そこから、庚申の夜は眠らずに過ごすという行事が行われました。

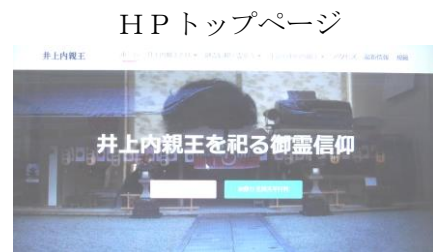
庚申信仰では青面金剛と呼ばれる独特の御神体を本尊としていますが、これはインドのヴィシュヌという神や馬頭観音が転化したものではないかといわれています。

庚申信仰はまた神道の猿田彦神とも結びついていますが、これは「猿」の字が「庚申」の「申」に通じたことと、猿田彦が塞の神とも同一視され、これを「幸神」と書いて「こうしん」とも読み得たことが原因になつていようです。また、庚申信仰では猿が庚申の使いとされ、青面金剛像や庚申塔には「見ざる、言わざる、聞かざる」の三猿が添え描かれることが多くあります。

本宮の東方約百mのところ鎮座する猿田彦神社の例祭は、毎年一月十六日に行われます。この日が例祭日になつている日は定かではありませんが、時期的にみて初庚申の日に行われていたのが、いつの頃からか定められた日に行うようになったと考えられます。

ホームページ更新中

本社の公式



HPトップページ
近々、「本宮不思議発見」のページを開設し境内の案内を行います。兼務神社の情報も掲載する予定です。また、新着情報も随時更新します。インスタとあわせてご覧ください。



行事食

一月七日は「七草粥」の日でした。そして十五日は「小豆粥」です。冬至にはカボチャを食べ、節分にはイワシを食べるといった、季節の行事食が食卓に出る家庭は少なくなつてきているのではないのでしょうか。祖父母と暮らしているとき、こういった季節の行事や食事を教えてもらえませんが、同居していない家庭では行事食は出ないのでしよう。もちろん、行事食がないとダメだということではありません。

粥といえば茶粥ですね。子どもの頃はよく食べましたが、最近は食べたことがありません。白粥も今は風邪をひいて寝込んだときに食べるものという感じですね。そのような中で、七草粥や小豆粥が食卓に出てくると、季節感が溢れてきます。また、古来の行事について考える契機にもなります。ところで春の七草って何でした？

Instagram @goryohongu
Twitter @goryohongu

#御霊本宮 #goryohongu を付けて投稿してください。

公式ホームページ
<http://goryojinja.or.jp>

